

ておく習慣が身につく前でもあったので、森本先生を写した写真を、筆者は一枚も所蔵していない。そのことが今になって一番大きな心残りとしてひっかかっている。

森本先生の九大以来の永年のご指導、ご厚誼に

心より感謝し、先生のご逝去に際し、ご冥福をお祈りする次第である。本誌への投稿を勧めていただいた、本誌編集委員長の保科英人氏にも、厚く感謝申し上げる。

千の風になった森本先生

小島弘昭

〒243-0034 厚木市船子1737 東京農業大学農学部昆虫学研究室

森本先生、これまで本当に有難うございました。先生から昆虫学について様々なことを学びました。先生との時間は、とても刺激的で、充実した時間でした。

私は先生のことが大好きでした。九州大学大学院に入学するやいなや、私が入学式をサボったため、先生に真剣に怒られました。「はじめをつくれ！はじめを！」と、すれ違い際に、廊下で怒鳴られてしまいました。その横を、同級生の神毛恵さんが飄々と通り過ぎていったことを今でも鮮明に覚えています。彼女も入学式をサボっていたことは、言うまでもありません。その当時、先生は学科長をされていて、先生自身も入学式に借り出されたような状況で、少しイライラされていたのだと思います。先生の部屋の扉には、「入学式に呼ばれたので、急遽、しばらく不在にします」という書き置きメモが貼ってありました。普段滅多に怒らない先生が怒られたと、周りも驚いていました。

先生が遠くに行かれる1週間ほど前に、先生にお会いできたことは本当に良かったです。先生は私に何かを訴えようと必死でしたが、喉にたんがつまって言葉にならず、私は理解することができませんでした。ごめんなさい。度々力を振り絞って起き上がろうとした先生を、私は思わず抱きしめました。先生は訳が分からなかったと思います。そして、私は思い切ってキスをしました。さすがに先生の口にはできず、額と手の甲に何度も、何度もキスをしました。これが、私が先生にできた最初で最後の愛情表現です。

先生は今ここにいませんが、亡くなったとは思っていません。先生は週末、時々私や学生を、先生の運転で食事に連れていってくれました。お世辞にも安心して助手席に座っていられる運転ではありませんでしたが、周りのドライバーの配慮もあ

り、私が乗車した時は、幸いぶつける等の事故はありませんでした。近くのアミレスに連れて行ってくださっていたので、乗っている時間はそれほど長くありませんでしたが、だいたいラジオをかけられていました。しかし、その時は、たまたま音楽CDをかけられていました。その頃よく耳にした秋川雅史の「千の風になって」という曲でした。

先生は、今、私たちの近くにはいませんが、眠ってなんかいませんし、死んでなんかいません。千の風になって、この九大、福岡の大きな空を吹き渡っていると信じています。

私には、先生と同じレベルでの研究は到底できません。弟子としてごめんなさい。でも、先生の意思とDNAをしっかりと受け継いで、先生とは別のやり方で、昆虫学を通じ地域環境や地球、人類の平和のために、少しでも貢献していきたいと思っています。

先生、そんな私や私たち後継者をどうかいつまでも見守っていただきたいと思います。

これまで本当に有難うございました。多様で楽しいゾウムシを眺めて、これまで猛烈に働かれてきた分、ゆっくり体を休めつつ、レビジョンの続きを書き進めてください。私が先生の近くに行った時、またお話の続きを聞かせていただけます。



森本先生と九大ゾウムシコレクション（吉武啓撮影）